

【資料紹介】

## 瑛九から山田光春への書簡 1938-1955年

## 大谷省吾

（2016年）

（2016年）

（2016年）

瑛九（本名：杉田秀夫、1911-1960）は、1930年代から50年代にかけて活躍した前衛美術家である。その作品は油彩だけでなくフォト・デッサン、コラージュ、エッチング、リトグラフなど幅広く、また戦後の1951年にデモクラート美術家協会を結成し、泉茂、鬚嘸、池田満寿夫ら後進に与えた影響も大きい。当館では、瑛九と親しく交友し、瑛九没後には詳細な評伝（『瑛九 評伝と作品』青龍洞、1976年6月）を記した画家の山田光春（1912-1981）が旧蔵していた資料を、ご子息の山田光一氏より平成24年度にまとめて収蔵させていただいた。これらの資料を整理して展覧会「瑛九1935-1937闇の中で「レアル」をさがす」を2016年に開催し、同展カタログに瑛九から山田光春に宛てた書簡のうち1935年から1937年にかけての58通を翻刻掲載した。これらの書簡は瑛九が前衛美術家としてデビューする前後の心境を赤裸々に伝えるとともに、当時の日本の前衛美術の動きも垣間見える貴重な資料であった。

しかし収蔵した資料の中には、上記展覧会で紹介した1935-37年以降の書簡も、もちろん多数含まれており、ここで残りの書簡（1938-55年）60通を翻刻するとともに、必要に応じて註をつけて紹介したい。また、これらの書簡資料のもつ価値について以下、簡潔に解題として記しておきたい。

1937年の自由美術家協会結成に参加し、第1回展にコラージュ連作《レアル》5点を出品していた瑛九であるが、その後、終戦に至るまでの戦時中はいわば雌伏の時期にあたり、具体的な活動がつかみにくい。自由美術家協会（1940年7月に美術創作家協会へ改称）には翌38年の第2回展には出品せず、その後も退会・入会を繰り返したことが知られているが、山田宛の書簡からは、協会に対する複雑な心境が垣間見られる。また日本の伝統文化への傾倒が、和紙に毛筆でしたためた詩（書簡62、63、64、73）などに窺え、一方では妹の住む京都に滞在して太田喜二郎の洋画研究所で基礎的なデッサンを学び直す（書簡79）など、戦時中は屈折を抱えながら苦しい摸索を続けていたことがわかる。活字化された資料からは知ることのできない戦時下の画家の活動や心の動きが、これらの書簡には記されているのである。

なかでも、この時期の心境を切実に吐露したものとして、書

簡79（1940年11月21日）を挙げることができる。ロマン・ロランを引用しながら「藝術は悲ゲキをたええたものでなければならない。ゼツ望を母体として花咲たものでなければならない。悲ゲキ的時代の人間をコプシ希望をもたしめる力をもたねばならない。そのためには何人よりもよく悲ゲキを知り、くわい疑（懷疑）にたたかいぬかねばならぬ」と主張する熱い言葉は、「悲劇を超える精神」として雑誌『美之國』（17巻1号、1941年1月）に発表された文章にも通じるが、活字化された文章よりも、山田宛の書簡のほうが、私信であるがゆえの遠慮ない激しさと切迫感が認められる。ほぼ同時期に、兄・杉田正臣宛に記された書簡にも「戦争は悲ゲキを日常のすべてに生み、人々の個人生活は、希望から遠ざかってあます。芸術家は近頃の様な戦争畫をかくことで民衆をコプシ、民衆を永遠の希望にみちびくことが出来るでせうか。民衆の心も、芸術もそんな甘いものではありません」との記述がある<sup>1)</sup>。世情がいわゆる「新体制」とよばれる翼賛体制へと急旋回していくなかで、制作上の孤独な奮闘の姿勢を貫こうとした瑛九の決意が、これらの書簡からは明瞭に読み取ることができるのである。

戦後の書簡は、やや間隔がとびとびになるため、瑛九の行動や思想を細かく追うのは困難となるが、自由美術家協会をはじめとする東京の前衛画家たちに対する距離感、あるいは美術ジャーナリズムに対する不信などは、やはり窺い知ることができる。その中で書簡110に見られる新しい活動（デモクラート美術家協会など）へ向けた高揚感が印象的である。

これら山田光春宛書簡を読み進め、註を付けていく作業を通して痛感したのは、資料のクロス・レファレンスの研究の必要性である。瑛九の書簡は山田宛以外にも、上述の兄・杉田正臣宛をはじめ、友人の画家たち宛、福井の後援者だった木水育男宛、美術評論家の久保貞次郎宛など、数多く現存が確認されている。それらを読み合わせてはじめて、芸術家の姿は立体的に浮かび上がってくるといえるだろう。これらのいくつかはすでに公刊されているが<sup>2)</sup>、すべてではない。以下の書簡の公開が、他機関の所蔵する資料との横断的活用によって、今後の瑛九研究に資することとなれば幸いである。

- 註
- ↑ 瑛九から杉田正臣への書簡、1940年12月21日（杉田正臣『瑛九抄』『根』発行所、1980年12月、18頁）
  - ↑ 杉田正臣『瑛九抄』『根』発行所、1980年12月、『親愛なる友 泉茂様 瑛九書簡と展評・デモクラートのことなど』マンモスアート、1999年、『瑛九からの手紙』瑛九美術館、2000年9月（木水育男宛書簡を収録）、藤森茂次「瑛九芸術についての一考察」『宮崎県立美術館研究紀要』1号、2004年3月（鬚嘸、オノサト・トシノブ、勝田寛一宛の書簡を収録）など。久保貞次郎宛の書簡は宮崎エスペラントの会により翻訳されているが、未刊行。石川千佳子「『瑛九による久保貞次郎宛エスペラント書簡』について」『美術教育研究』21号、2016年7月、48-51頁）において紹介されている。

<p><b>書簡翻刻</b></p>
<p><b>凡例</b></p>
<ul style="list-style-type: none"><li>以下では山田光春旧蔵の、瑛九から山田光春に宛てた書簡118通のうち、1938年以降の60通を翻刻する。書簡番号は日付順とし、118通のうち1番から58番については展覧会図録「瑛九1935-1937闇の中で「レアル」をさがす」(東京国立近代美術館、2016年)に掲載しているため、以下の書簡番号はそれ以降の通し番号として59番からとする。</li> <li>日付は消印による。消印のない書簡は推定時期の根拠を注記した。</li> <li>漢字、かなづかい、傍点は原文のまま。誤字もそのままとした。</li> <li>判読できない文字は●で示した。</li> <li>本文中の段落替えは原文のまま。宛名書き中の「／」は改行を表す。</li> <li>必要に応じて大谷が註を付けた。</li> <li>翻刻にあたり山田光春ご子息の山田光一氏の協力を得た。また判読にあたり中谷有里氏（高知県立美術館）の協力を得た。記して感謝申し上げる。</li></ul>

**書簡59 1938年1月8日 封書、和紙1枚、縦書**  
**表：愛知縣名古屋市熱田新宮／坂町大喜伸治方／山田光春様**  
**裏：宮崎市廣島通り／郡司方／瑛九**

	松本静太郎〔註1〕	
三春會	瑛九	
	山田光春	
とする		
君	松本は天才だった。	
		瑛九
山田光春殿		

〔註1〕松本静太郎（1897-1982）洋画家。岡山県生まれ。東京美術学校に学んだ後、宮崎に移り瑛九と親交を結ぶ。ここで言及されている「三春会」は山田光春「瑛九 評伝と作品」(青龍洞、1976年、173頁)によれば実現しなかった。

**書簡60 1938年1月10日 封書、和紙1枚、縦書**  
**表：愛知縣名古屋市／熱田新宮坂町大喜方／山田光春殿**  
**裏：宮崎市南廣島三／郡司方／瑛九／一月十日**

	三春會は	
	まだ名前がかわるかもしれん	そのつもつりでおれ
		瑛九
山田光春殿		

**書簡61 1938年1月12日 封書、和紙2枚、縦書**  
**表：愛知縣名古屋市／熱田新宮坂町／山田光春殿**  
**裏：宮崎市／杉田秀夫／一、十二**

	(1枚目)	
	なつだけ墨 <sup>すみ</sup> でゐてくだゐ	
		瑛九
光春大兄		
	時々すわれ	
	時々うなれ	
	時々畫かけ	

余ゐまだ  
女にほれ  
られん  
まだ、まだ  
杉子先生に余及ざること遠し  
（図1：余白に毛筆素描あり）

（2016年）

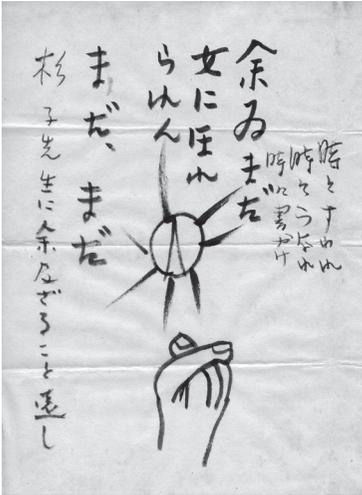


図1

（2016年）

瑛九から山田光春への書簡 1938-1955年 | 27

(2枚目)  
長谷川の所の死屍  
よろしくやつちよきやつたか、  
おはんな大が爺さんのうまれかわりじや

大砲尻のよな畫をかきなはれ。

為  
光春

**書簡62 1938年1月30日 封書、和紙4枚、縦書**  
**表：名古屋市熱田新宮／坂町 大喜伸治方／山田光春兄**  
**裏：宮崎市／杉田秀夫／雨の日**

(1枚目)  
春雨のつめたさ  
今日の温さ

山光兄

(2枚目)  
残雪前峯入  
畫圖  
日光斜映満  
牆隅  
山居寂寞微  
風姿  
千樹琪花飛  
欲無

(3枚目)  
森 暁紅 作  
古田草庵 曲  
端唄  
二筋道  
道は二筋 二人の心  
きつく結んで どつちへ行か  
戀の極樂情けの地獄  
それはこの世の繪そらごと まゝよ  
どつちだつて いぢやないか

秀夫謹書

(4枚目)  
猛虎聲山月高

**書簡63 1938年3月22日 封書、和紙4枚、縦書**  
**表：名古屋市昭和区／柳ヶ枝町二ノ五六 小川治作様方／山田光春先生**  
**裏：春雨のなごりうれしや花がちる／宮崎市南広島／杉田秀夫／昭和十三年三月二十二日**

(1枚目)  
拝啓  
御無沙汰致し候程お許下れ度く大字を使用致候

(2枚目)  
二十六日 晩 日本医師會館にお出願へれば幸甚に存じ候由、兄よりつたへてくれとに候 兄も長谷川にあへればあいたい由なり、よしなによるしく願上候  
日本医會館は駿河台にて、省線「お茶水」下車そらの人物

(3枚目)  
におたづねあれば、すぐそこなりと指示するならんと愚考致候

夜來の雨もからりとはれ春光はうららかに窓辺になめ映じ候。南洲先生の

(4枚目)  
春光不<sub>レ</sub>似勁秋清  
暖紫嬌法撃<sub>二</sub>我情<sub>一</sub>  
夢在芳林桃李裡  
驚來門外花賣聲

なぞ口辺に上り候 野辺に出て花を見また花をみらんとの考へに候 草々●●  
光春大兄 寂

**書簡64 1938年5月2日 封書、和紙1枚、縦書**  
**表：名古屋市昭和区／柳ヶ枝町二ノ五六／小川治治方／山田光春兄**  
**裏：旅立つ日／瑛九**

わけは  
ないぞへ  
みな為し  
まかせ  
これが戀路  
と云ふものか

光春どの  
(図2：余白に毛筆素描あり)



図2

瑛九

**書簡65 1938年5月6日 葉書、縦書**  
**表：名古屋市／昭和区柳ヶ枝町／二ノ五六／小川治氏方／山田光春兄**

心サマヨヒテイマダ九州地にあり、マツベカラズ  
されど予かならずその地へ行かん  
酒もよし酒なきもよし寂しさよ  
(以下4行は朱文字)  
もみじ白う  
はだかの寒し  
夕かな  
福岡の雑餉隅なんいへる所にて

瑛九

**書簡66 1938年5月20日 封書、和紙1枚、縦書**  
**表：名古屋市柳ヶ枝町／二ノ五六／小川治様方／山田光春様**  
**裏：於東京／瑛九**

やつたことはえ、ことにきまつちありますが  
あんた出してえ、ことしましたよ、  
たいへんみんな勉強してみていじらしい。  
みにくでせうね  
みにきたら解ることは解りますよ  
三郎さん[註1]の画室にて  
光春兄

[註1]「三郎」は自由美術家協会のリーダー長谷川三郎(1906-57)。長谷川はこの時期、品川区大崎長者丸270にアトリエを構えていた。

**書簡67 1938年6月12日 封書、便箋2枚、縦書**  
**表：名古屋市昭和区／柳ヶ枝町／二ノ五六／小川作治氏方／山田光春様**  
**裏：瑛九**

(1枚目)  
ペンにて失礼御めん下さい。  
オヤチ様死なれた由。父を先におくられたことはなによりの孝行にて、悲しみや苦しみのふえたことと思ひますが、お祝致します。親は子に先だたれるくらい悲つうな事はない由に候へば、かく私は信じ候  
このさい貴兄色々和生活かいかくを考へられることと思ますが、白亞社[註1]にて動くこと昨夕長谷川兄より話あり、貴兄の決心一にて、長谷川氏及田村宗太郎氏[註2] 非常に熱望されてゐる、小生もそうなることを非常に白亞社のため小生のため、貴兄の為めにもつともよきことにはなきかと愚考致しをり候  
この前は貴兄その話あつたが、オヤチ様の死去により貴兄現實いくぶんへんくわいたしたことと思ふ。  
貴兄もこのさい決心するの要かんじんと存じ候、士はおのれをしるものために死す。長谷川は君をしるものといふべし。  
貴兄決心一つ返答の事。

(2枚目)  
予定  
長谷川個展自由展大阪開催[註3] のため今月末下阪、その時面談されること。(田島先生(神戸)と三人にて) 貴兄は小野里[註4]のかわりに入社すること、月給は六十円位なり。小野里は小生が編輯する美術雑誌の方にくる様になるとにかく貴兄の現在のじようせい一筆おまちおり候。  
東京の戀人いかがあいなり候や、時々思ひ出し候。  
貴兄の自由展の作品種々なる人々に好評にてうれしく思つてゐる。

九  
光春兄  
下宿のおじさんおばさんによろしく  
住所は 三郎兄方にておく

[註1]白亞社は長谷川三郎が谷川二郎の名前で1937年に始めたデザイン会社。『日刊美術通信』1937年10月26日1面には以下のような記事がある。「抽象絵画の權威として知られてゐる自由美術家協会の長谷川三郎氏は純粹美術の探求と共に近代文化面における商業美術の更生に対し非常な関心を払つて居たが愈々同協会の田村宗太郎、小野里利信の二氏と提携して白亞社を創立し来る十一月初旬より商業美術の実験的事業を開始することに決定した白亞社建設の趣旨としては建築意匠、ポスター、衣裳、舞台装置、印刷、壁画、染織図案、マネキン、ネオンサイン、ショーウインド構成等の商業美術のあらゆる部門に亘り新生面を開拓しやうとするものでデザインには欧米の最新理論を基礎にわが国独特の古典味を加へて純粹美術の實際的应用に乗り出すわけである」(無署名「画室から街頭へ 自由美術家協会の長谷川画伯等 新たに白亞社を創設」)。

[註2] 田村宗太郎は図案家。新劇の舞台装置等に関わつた後、長谷

川三郎の白亜社に参加。1937-38年に雑誌『アトリエ』で商業美術に関する文章を連載。

[註3] 第2回自由美術家協会展大阪展は1938年7月11日-17日、大阪市立美術館で開催。

[註4] 小野里利信（オノサト・トシノブ、1912-86）洋画家。津田青楓に学んだ後、1935年に黒色洋画展を結成、1937年の自由美術家協会結成には会友として参加し、白亜社にも設立時から参加していたが、この年に故郷の桐生に帰っている。長谷川はその後任として山田光春に声をかけたらしい。ただし山田はこれを辞退した。

**書簡68**　1938年7月1日　封書、和紙1枚、縦書
表：名古屋市昭和区／柳ヶ枝町二ノ五六　小川作治氏方／山田光春兄
裏：於東京牛込久保てい／瑛九

山田光春と久保真次郎の1938年7月1日の書簡。

其の後いかがにおくらしですか　長谷川兄と會はれるのも近い内と思ます　どうかなんとかして白亜社に入社される様になるといいと心から願つてゐます　君の為に皆んなの爲めにも君の方の学校の生徒の畫　二、三百枚もらへないだろうか、久保さん[註1] が外遊するのにあつめてゐるのです。今久保氏の所でその方の相談あいてになつてゐる　彼も東洋に関心をもつて石とう沈石田牧溪大雅堂などの●何十円もする複製をもりもりかつてゐて愉快だ、その相談相手も小生つとめてゐて楽しい　久保氏は八月四日出帆、このごろ毎日東洋古畫をみてくらしてゐる　大塚巧藝社しん美畫院などなかなかごうせいな復制があるのでよろしい

笑みたれば畫をかく。死にきれず寝かへりをうつかぶと蟲。我は死なぬナア

瑛九
山田光春兄

君の戀人には會ひたいと思ひながらあわなかつた。お送つてくれれば
作品は久保あてに。
牛込区砂土原町三ノ一八久保貞次郎

山田光春と久保真次郎の1938年7月1日の書簡。

[註1] 久保貞次郎（1909-96）美術評論家、美術教育者。栃木県生まれ。東京帝国大学卒業。1935年12月に日本エスペラント学会の使節として宮崎を訪れて瑛九と名のる以前の杉田秀夫と親交を結び、その後彼が没するまで支援を続けた。この書簡にある通り久保は1938年8月から1939年5月まで欧米を旅行している。

**書簡69**　1938年7月15日　葉書、縦書
表：愛知縣名古屋市／柳ヶ枝町三四／小川作治氏方／山田光春兄

先日お願致しました　児童作品まつてゐるのですが　もらへませんか、

久保さんは八月四日出帆します、
瑛九]（印）
作品は
牛込区砂土原三六
久保貞次郎方へ

**書簡70**　1939年2月6日　封書、便箋4枚、縦書
表：名古屋市昭和区柳ヶ枝町／二ノ五六／小川作治様方／山田光春兄
裏：京都市上京区小山堀池町／三四ノ一　杉田方／瑛九

(1枚目)
これは再生した僕の第一回の通信だと思つてくれ給へ
於京都一九三九・二・三　夜

あれつきりになつちやつたね。元氣の事と思つてゐる。僕はあれから　レンアイをしてそしてそれを失敗して、失敗さして(と今だつたらかくべきかもしれない。)レンアイの初期ごろから(十二月初)すこしづつ僕は人間的なものを身につけ、みづから風の線をきつてその凧にのつてゐるようなあのじょう態から離かけはじめ、レンアイよりも藝術にミワクされそうな心理と、レンアイがケツコンへのしんでんをさまたげるような機會とにめぐまれて(それも私の内にある人間的めざめがその機會を自から作り上げて行つたのかもしれぬ)一月初から京都にきた。一ヶ月はまるで、病人の様にすぎてゐつた。くわいふく氣にある病人の様にといふ方がてきせつであらう。そのなかで毎日ブラツシユをにぎるようになってゐつて、今僕は僕のすばらしい愛を再び、或は最初に描き上げて行つといふ夢をいだきはじめて君に手紙をかく。戦争のこんらんが、そして又僕個人のこんらんが(キヨムの心境)がおしへてくれた行きつきのドアにかかれてあつたものは人間――愛

(2枚目)
であつた。
制度、国家　民族、みなそれは人間の上に、打ちたてられた、或はうちたてたものにほかならない。不幸を知るもののみが、幸福の何たるかをしるにちがいない。戦争の不力ヒ的なものがおしへてくれるものは又そのもの内容にもつともあいはんした人間性、愛でなければならぬ。いまこそ知ることが出来るのだ。藝術がすべての時代　制度をのりこへてようござれ、人類の血しをの中にあるといふ事が。たへづわれわれは生きつづけねばならぬ。となりの家が砲火につぶされるまで、人間の生活はまだつづけられねばならない。そしてその後までつづけられる大切なことはそれだけだよ。

僕は一年振りに自己をとりもどした氣持でゐる。嵐がおしへてくれたものは實に大きかつたのだ、僕は今度こそ一つのエコールをうちたてるだらう。この世紀の上に。そしていかに僕が僕

のために忠實に人間を愛したかといふことを知らしめるために。

山田光春と久保真次郎の1939年2月6日の書簡。

(3枚目)
自己のためにといふことがいつの場合でも人間のためであるといふかく信にみちた、それゆへにのどかな自己を作りあげたい。一人の個人の力がなんだらう。このうたがいはたへず僕をなやました。一人の正道を歩くものがゐて、それが何になるだらう。それが僕の心をたへずおびやかしつづけた。そしてその思想のうしろにはいつも人間なんかなんだらう。人類がなんとはかないものだろうといふ影を負つてゐたのだ。しかしその様なことにまけることは、もはや人間を否定するより外に道のないものになつて行くのだ。そのしようこにはそのようなごうまんな思想の生活にはたへきれぬぜつぽをと土の底にひきこまれる様な寂しがついてまはるではないか。しかしこれはとうぜんのかかる思想からせおいかへされねばならぬものであつた。人間をこうていする。人間をすべての上に。そこからしか人間のあらゆる思考も認しきもけつして實在はしないのだ。一人の生にみちた人間こそ

(4枚目)
求めるものなのである。山の繪はすてるほどある。しかしこの時代の人間の見た山の繪がないといふことだ。一人の眞の意味の人間は　人間全体のふへんてきな人間性の表現なのである。なぜわれわれが一人の個人にすぎないダビンチにこんなにも心を動かされるのか。
パツハに、ゲエテに。西郷南洲に、彼等は人間をひとしく第一に於て思考し行動し、表現したのである。一人の個人を、それは又一枚の作品をといふこと、一枚の作品には個人の觀念が、創造されてゐなければならぬ。
×
だいぶ理論をかきましたが許てくれ給へ。續きはづいぶんあるのだが。
戀愛はずいぶん色々のおしへてくれた。今はすべては愛につながり、それは人間性を作り上げる。その上に藝術は花咲くものであるといふことのよろこびにひたつてゐる。
ひまとキシヤ質があつたら遊びにこないか、とまつてもよろしい。若き人々とくらしてゐる。
光春兄
九

**書簡71**　1939年4月24日　葉書、縦書
表：名古屋市／昭和区柳ヶ枝町／二ノ五六／小川作治方／山田光春兄

その前の夕より
瑛九
一昨日　三郎兄の所で終日遊ぶ　小野里しきりと描てゐる由、東京についたら色紙は俺がもつてゐた

**書簡72**　1939年5月1日　絵葉書、縦書
表：名古屋市／昭和区柳ヶ枝／町二ノ五六／小川方／山田光春先生
裏(写真)：(明石名勝)人丸山月照寺

八十銭ヲカリントシテ　オバサンヲクドキシ話　長谷川三郎ニスレバ　興ズルコトカギリナシ　今亦明石ニ遊ぶ　幸ニシテ酒アリ
五月一日
瑛九

**書簡73**　1940年2月14日　封書、和紙1枚、縦書
表：名古屋市昭和区／柳ヶ枝町二ノ五六／小川様方／山田光春様
裏：宮崎市／瑛九

山家集
花ちらで月はくらぬ世なりせば　物を思はぬわが身ならまし
花ちらずさへわたる月の一時を造型せんと思はおろかなる事に候や
山家集
今更に春を忘るゝ花もあらし　やすく待ちつゝ今日もくらさむ
同じく
春風の花ちらすと見る夢は　さめてもむねのさわぐなりけり

いかがおくらしなされてゐるかと春雨のふれば筆はしらせし候
美之國に貴兄の寫眞をみて[註1] 健在をよろこび候
傑作作りおられ候事と想像致したのしみおり候

白詩
巧拙研賢馬相是非す
何如ぞ一醉盡て機を忘る
君知るや天地中の寛窄を
鵬鷲鸞皇各自に飛ぶ
酔て古人と語る唯一の楽しみに候らへども古人仲々に正氣を尊び無欲を重ずゆえになかなかにその様な空氣作るは難く候

陶詩
洋洋たる平津
乃ち瀨ぎ乃ち濯ふ
邈々たる遐景
載ち欣び載ち囁る
心に稱て云へば
人は亦足り易し
茲の一觴を揮て
陶然として自ら樂む

心はどこにも遊ばず　南洲先生の今人に在らずして古人にありの昨今に候
九





**書簡80**
**1940年11月頃**
**封書、便箋4枚、縦書**
**表：名古屋市東区／大曾根町中一ノ二七三／淺野氏方／山田光春様**
**裏：京都市／上京区／小山堀池町／三四ノ一／杉田秀夫**

(1枚目)
お手紙有難う、それから幾日がすぎた。何度か紹介文を書きかけてみたが氣にいつたのか出来ないのと描く方に氣をとられてしまつて今日になつてしまつた。

出来たから同封する。原稿紙二枚といふことであつたが長すぎやしないかと思つたが二枚かいた。てきとうにして下さい。僕は一月やるのなら始めの方によつた方がいいように思ふ。今日は朝から筆の方を休んでペンをもつてゐる。美之國が(久保氏から僕の住所をかぎたして)原稿をせひかいてくれといふので、今かいた所だ。新年号です。でたらよんでほしい。ひさしぶりの断片でないものだ。「悲劇を超える精神」、ごくありふれたことだけかいた[註1]。

それから君の照介新聞でかかしてくれる所があつたらいつて下さい　枚数さえわかればおかきします。ぼくはあれから研究所で二十号と三十号とをかいた。まだほんとなつたらぬもので毎日失望をくりかへしてゐるが決してやめない。明日から又三十号をかく予定である。坂野君はくるか、勉強してゐることと信じてゐる。よろしくいつてくれ。

杉田秀夫
山田光春様
(2枚目)[註2]
山田光春氏の仕事に就て

瑛九
山田光春氏は日本洋畫界に於て少數のすぐれた新人の一人であると信じてゐます。山田光春氏は東京では毎年美術創作家協会(もとの自由美術協会)の会員として作品を発表してゐられるのですが、今度名古屋で作品を並べられるのです。名古屋は山田氏の郷里でもあり、見る人も見せる人もうれしい事だらうと思ひます。山田光春氏は自然からつつしみぶかい態度をもつて自然の教訓を大小もらさず受けとろうとする人です。十九世紀以後絵画は技巧の上でいろいろな流派がながれて、観賞者をいたづらにまどわしたのでありますが、その様なものにまどわされることなしに、虚心に自分の生活をとほして作品をみればよいのであると思ひますが、不幸にして我々を見る人々の立場から素直に自分の生活を通して見るによき対象となる作品を発見するのに苦しみま

(3枚目)
した。それはあまりに技巧化した意味のさうじよく品ばかりみせつけられてきたからであると思ひます。山田光春氏の作品はかゝる今迄の技巧一てんばりの専門化

した作品に失望してゐる人々を必ず満足させることを信じて疑ひません。

我々はかゝる正統な生きた畫派に対して後援することの義務を感じます。今迄技巧のいろいろな変化にうきみをやつた近代藝術の病氣をなほすためには山田氏の如き新人を日本藝術界の為に育てることが最も必要な事だと思ひます。山田氏はよく子供を描きます。子供は親にみだかれてゐたり砂の上であそんでゐたり栗をむいたりしてゐました。花もたくさん描きました。花はいつもつゝましくその美しさをみせぶらかす様な風には見えませんでした。風景はたえず我々を思索の世界にさそうように静かでした。氏をキタイしてゐる一人として友人であるがゆえに駄文をろうしました。

(4枚目)
郷里の皆様がこのすぐれた画家を日本藝術界のために後援し、勵まして下さることを切望してやみません。

[註1] 瑛九「悲劇を超える精神」『美之國』17巻1号、1941年1月。

[註2] 当館受贈時には、この2枚目～4枚目の便箋は次の「書簡81」の封筒に入っていた。しかし1枚目の文面から察するに、本来はこの「書簡80」に同封されていた可能性が高い。

**書簡81**
**1940年12月初旬**
**和紙2枚(うち1枚白紙)、縦書**
**封筒なし(後年の山田光春による整理用袋)**

(1枚目)
ドラクロア[註1]
讀みかけたら面白くてたまらんのでかりて行きます
ミレーもなにげなく見つかつたのでこれも一緒に、よんだら小包で送ることにしませう
しつかり勉強せんならん
荷物はすこしおまい　がんばる

秀夫
光春様

[註1]ドラクロア著、植村鷹千代訳『芸術論』創元社、1939年1月。

**書簡82**
**1941年2月17日**
**封書、便箋3枚、縦書**
**表：名古屋市東区大曾根町／一ノ二七三淺野様方／山田光春様**
**裏：京都市上京区小山／堀池町三四ノ一／杉田秀夫**

(1枚目)
個展の時はお手傳どころか、かへて君に色々めいわくをかけてしまつてすみませんでした。手紙を書こう書こうと思ひながら今日になつてしまつた。こいうふ生活をまだつづけてみて恥しい。(あす書こう書こうといふような生活さ)

繪畫は大きな岩石のごとく僕の行く道の眞中によこたわつてゐる。むつかしいなまつたく。君も百号の大作にかかつてゐることだろうと考てゐる。創作展[註1]は早く始ることになつたらしいね　君や阪野君[註2]が出品すれば見に行くことにする　それよりも前に僕はどうせ上京するつもりである。京都はカイサンだし、それよりも僕の京都生活も、それ自体であまり意味をもつてこなくなつてゐる。といふのはまつたくの孤獨生活だからね。京都では、研究所はやめた。これは僕の生活の方向と違ひすぎるし、研究所を生徒の一人として改革することは今の所不可能だと思つたし、そのことが僕の第一の仕事でもないからだ。制作はちちとしてすすまない。それがために僕はやつきになつて思想のかく立を目ざしてゐる。讀書は熱してくると

(2枚目)
一日に四冊までやる。今の所一つの思想精神がなければ、身体があたたまらない。すぐれた一頁はある時代の一パイのウオツカみたいなものだ。こんなつまらん事書くのはよそう。その内一度遊びにやつてこないか、こちらならゆつくり藝術論だけやつてわかられる境ぐうだよ。僕は新しい繪畫藝術の方向だけはつかんだつもりでいる。理論が感性にまで具体化するには刻々の闘争が必要らしい。めばしい作品は一枚も出来ない。その點はたしかに僕をゆううつにする。問題はやはり思想の生活の大手術を要求するらしい。僕は自分にアカデミックな要求の多いのに驚くし、藝術家としては狂氣の(エイ智とそれからくる熱情)不足に自らおどろく。熱情はありすぎるのだといふ俗習的觀念が僕をすつかりアカデミックにしてしまつてゐたのだ。自分は俗人ではないと觀念するくらい俗なことはない。といふやつと同一わけだね。

(3枚目)
この様なあやまつた自信にどくされてゐるね、日本の我及我々のしゆうゐのエカキ達は。
×
君の個展はやはりあんな風でやつた事はよくなかつたね。もう一度でなおしてやりなほしをやらねばゐかんと思ふ。

×
先日　今井(美之國)[註3]がきた。それから藤田君夫妻[註4]もきた。もうすこしつつかんだ話がしたかつたといふ後悔ににたものがのこつてしまつた。態度を今一歩眞面目にしたいとおもつてゐる。

×
戀はまだしない。する必要はないのかもしれない。よくわからない、(僕の生活思想の立てなほしの為めとして)

×
阪野くんにも手紙を出すつもりだがよろしくいつてくれ。時にあいますか、實は彼からの手紙をまつてゐるのだが。

九
光春兄

[註1] 第5回美術創作家協会展は1941年4月10日-21日、日本美術協会(上野)で開催。

[註2]「阪野」は書簡77の坂野歌一の誤記。このとき坂野は《湖水にのぞむ》《習作として》《少年》の3点を出品。

[註3] 今井繁三郎(1910-2003)洋画家。自由美術家協会会員で雑誌『美之國』編集者も務めた。

[註4] 藤田穎男は宮崎の画家で瑛九の友人。1935年に瑛九、山田光春らと「ふるさと社」を結成。

**書簡83**
**1941年4月4日**
**封書、便箋1枚、縦書**
**表：名古屋市東区／東大曾根町／中一ノ二七三淺野様方／山田光春様**
**裏：京都市牛込区／砂土原町三ノ十八／久保方／杉田秀夫**

お手紙有難う。僕は東京に来てゐます。非常にいそいでゐたので名古屋にはよれませんでした。創作展の諸兄にはあいました。中々ガツチリした考へをもつてガンばつてゐる人もゐるのに感心致しました。僕も受付だとか會計だとかの手助をすることにしました。毎日制作をやつてゐます。みぢめな氣持を味ひながら。今までの不勉強のムクイを味ひながら。君の百二十号はぎたいしてゐます。

シンサには出てこないのか。坂野君は例の作品を出すだらうね。どうぞよろしくいつてくれ、其の他の諸君は出品されたか。
光春兄
秀夫

**書簡84**
**1941年7月20日**
**封書、便箋1枚、縦書**
**表：名古屋市東区東大曾根町／中一ノ二七三／淺野様方／山田光春兄**
**裏：京都市牛込区／砂土原町三ノ一八／久保方　杉田秀夫**

手紙を出そう出そうと思ながら心外にもすつかり失敬してしまつた。この前、といつても数ヶ月前に坂野君が突然上京して、東京で生活したいようなことをいつてゐたので、一おう反對した。山田に相談したかといつたら相談しないといふ。歸つたら相談しろといつてわかれたが、その時は是非上京する風で、荷物をとりにかえるのだといつたまゝでわかれた。僕はその時君に手紙を出さねばならなかつたのだが、坂野くんからなんとかいつてくるだらとまつてゐたが、こず、上京したのかどうかもわからず、その儘になつてゐる。どうしてゐるかしらん、彼もいくらか太佐[註1] 風な所がある様で、常識がかけてゐるようだね。君の方ずい分いいそがしいことだらうね。世上ではずいぶん色々なデマがとんでゐるようだナ。僕どうにか讀書と繪畫にくらしてゐる。自由展はやめた。

けつこんはどうなつたか。じゅんぴ中かい。とりあえず、あまりたよりをしなかつたおわびのみで。近日中に軽井沢の方に行くことになってゐるが、ひまがあつたら一筆かいてくれ。

秀夫  
光春兄

〔註1〕太佐豊春(たさ とよはる、1921-2005)宮崎の画家で瑛九の友人。

**書簡85　1941年12月1日　封書、便箋2枚、縦書****表：名古屋市東区／東大曽根町／中一ノ二七三／山田光春兄****裏：十二月一日／宮崎市南広島通三／杉田秀夫**

(1枚目)
お手紙有難う
御ケツコンの由お目度う
昨年名古屋生活が思ひ出されてならん。
貴兄の心境も大分進歩されしことならんとひそかに思ひます。
新居も一軒おいたとなりとは君らしくてよろし。
動ざること林しの如しか。
静かなること林の如しだつたかしらん。

僕はこのごろ大たい病氣と遊んでゐる。作品はず一とかいてゐる　宮崎にかへつて一變しつつかあると思つてゐる。
タッチの意味がわかりかけてきたこと。
エカキはエカキでなければならんが、なかなかそれはできん、道樂もんゴクドオもんにどんな時でもなつておれんようにいつもエカキでいることはよほどの馬鹿にならんとだめですな。
そんなこと考へてゐます。

(2枚目)
病氣でさけのめんで、酒のまず遊ぶことおぼえ、このごろ仲々女給さんなどにもてます。
寫生してゐる時が一番いいきもちで、女の子と遊ぶのがそのつぎで、三番がネドコン中で本よみじや。
この二、三、日ねどこにて本よみばかり　何の病氣かて、ややこしうて云われん、たいしたことない。

生きて行くことが、一タツチ一タツチわかりかけてたのしゆうなりよりもす。

私、病氣なおつたらとか
金ができたらとか
せんそうすんだらとか
たらはやめて、やりよる。
あんたもその氣で女房カワイがんなはれ

光春兄  
秀夫

**書簡86　1942年3月25日　封書、便箋2枚、縦書****表：名古屋市／東区東大曽根町／二七二／山田光春兄****裏：宮崎市南広島通り三／杉田秀夫**

(1枚目)
大変御無沙汰してすみません。今年になつてどこえも便りを書かんしまつ、特に君に對しては例の「何かかいてくれ」がたつて返事がかけず、よわつた、もうあれはかんべんして下さい。
トコノマ藝術カクキニナレズ　ゴブサタシタワ申ワケナシ。

君の制作如何、愛妻カタワラでユウユウとしておられることと思ます。
美術創作展も近づきましたネ〔註1〕。
大作を出品しますか、エハガキでも送つてください。

杉子も獨立に出したそうナが一點しかなラベテクレナカツラシイ〔註2〕、僕はアイカワラズ、小品をかいてゐる。
終日アクセクとしては、我才のたらざる、氣弱キ、努力スルエネルギイのタラザルをたんずるのみ

(2枚目)
畫の事はムツカシスギて語る氣になれず。
モノモンとしてスケチ板を十日もかいてゐる。

小説は七、八、年前によみとばしたものを再讀　いつも感ずるワ
若き日、汝何をかなせし、若き日汝、いかに粗末なる眠をもちてよみし、ととひかえず日日です。

思ひ出すは大原コレクション、二流三流とあざけりシアマンジヤンすらいかにすばらしき男なりしかな。
ピサロ　ルノアール　モネー云ふもおろかなり。
我が若き日の不勉強ののろわしきかな。
さよなら
奥様によろしく
秀夫  
光春兄

〔註1〕第6回美術創作家協会展(1942年4月4日-12日、日本美術協会)に山田は《春1タンボポ》《春2梅》《春3やぶ》を出品。

〔註2〕瑛九の妹・杉田杉はこの年、第12回独立美術協会展(1942年3月5日-23日、東京府美術館)に《独り》を出品。

**書簡87　1942年8月12日　葉書、縦書****表：名古屋市東区東大曽根町／中一ノ二七二／山田光春様****／京都市左京区浄土寺／馬場町十一／杉田秀夫**

お手紙有難う
姉の病氣も大分いい方ですが、八度五分ばかりの熱がつづいて、その原因が、大學的アカデミックなつい究にかかわらず

からないので、まだ僕も名古屋行きがはつきりしません。
今日は久しぶりに七度七分です、この調子で行けば、四、五日内にはあえるでせうか、行くことがきまればデンポーかハガキします
マダムによろしく。

**書簡88　1942年8月20日　葉書、横書****表：名古屋市東区／東大曽根町中一ノ二七二／山田光春様****／京都市左京区浄土寺／馬場町十一／杉田秀夫**

せつかく行けるかもしれないなどといつて、いまだ行かず、心苦しく思つてゐます。
病人が、もうなほるのだらうと思つてゐたのに、又病勢がぶりかえて、ちよつと歸省する日はいつのことやらわからなくなつてしまつた。
昨年はいま一步でといふ所自分の病でたをれ、その境地を取りかえすのに一年かかり、こんどこそ一つのかい段にとうたつたと、出来かかつ●の一枚の作品ををきざりにして京都にきてしまつた。
又谷間が出来る。
心がチ子にくだける。

君のやすみも20日までだらう、かえりにでなくだつたら行けるかもしれないぬが、もしやすみが30日までだつたら一報してくれたまえ、坂野君によろしく。
マダムによろしく。

**書簡89　1943年5月11日　封書、便箋1枚、横書****表：名古屋市／東区東大曽根町／中一ノ二七二／山田光春兄****裏：宮崎市南広島通り／杉田秀夫**

山田光春兄
miyazaki　43.5.9.　夜
久しぶりの手紙なつかしかつた。
君が昨年すでにオヤチになつたのはうれしかつたが、病氣をしたのはこの時代的でいたましい、しかし君の精神はけんこうそうだし、光一君もマダムもけんこうそうなけはいを感じて安心しました。

エはすぐ送らうと思つたがさすがに久しぶりに君に見てもらえうと意識するとどうしてもすこし筆がくわえなくなつたので、明日この手紙と一緒に送ることになるだらう〔註1〕。
2号だ、がこれは僕の重要な作品の一つだと思つてゐる、僕はこの題材で50か80をかこうと思つてゐるし、それですぐもたいへんすきなものなのだ、君にみてもらつて感想をききたい。
10日ばかりみてもダメならとてもダメだが、僕は1ヶ月ばかりかかつたのだ。(筆をとつた時間は少いものだが)
カイエダール　マチス、ピカソ、シヤガアール、アートナウ、チドロオ　有難う

今日寫生からかえるときてゐたのでよきしないうれしきですぐみるのが惜しい氣がした。
僕はこのごろは小包がおくれがちなので1週間ぐらはかかるだらうと思つてゐた

君のいつもかわらぬ友情を感じてうれしかつた。
マチスのデッサン集は忘れてゐた。
僕の今もつともほつしてゐたものだ。
マチスは大原のおかげでずいぶんインサツで見ても率直に心を打つてくれるのでとくに有がたい。
ピカソのすごさはやはりまだつつばりきれぬものがある。偉大すぎるのか　僕と質が違ふのだらう。
大いに勉強してみるつもりだ。
シヤガールのなつかしさ、ブラックの雄大さ、(僕は彼のマドロスの様な寫眞をすぐ思ひだす、きつとかれもシニヤツクの様に海がすぎに違ひない。)
なんといふゆうゆうとしたそれでいてデリケートなニユアンスだらう。

大原に行くジユンビがこれですつかり出来るといふものだ、いつか行つた時はフランス映画のケツ作をみてすぐ行つたのでたいへん率直に心に打れた　第一にきたことは生活のせいりの高さだつた。
それはその少し前にみた映画のおかげだといえる。
そんな意味でこんどもこれら大原に行くまで毎日勉強するつもりだ、君の本で、　大原えは17日に立つて行くことにした。
京都の姉がすつかりカイフクしたのでツレテカエルのです。
25日頃までには宮崎えかえる予定だ。
君、身体は大せつにしたまえ、すぐれた藝術家はすべて自己をてきかくにはんだんして自己誤解をさけてゐる様だね、式場のヤクしたゴツホの手紙〔註2〕をよんで彼が彼をじつによく客観的に批判してゐのに打れた。
君も君の身体(又精神だ、)をよくはんだんして無理せぬ様、まだみぬ光一君にダツコを　マダムにあいさつを、共に君にたくして送る。

Q. Ei

〔註1〕《園にて》1943年、油彩・板、22.7×16.6cm、東京国立近代美術館蔵

〔註2〕式場隆三郎編『夜の向日葵　テオ・ファン・ゴッホの手紙』畝傍書房、1942年

**書簡90　1945年1月21日　封書、便箋1枚(両面)、横書****表：名古屋市東区／東大曽根町中一ノ二七二／山田光春様****裏：宮崎市南広島通三／杉田秀夫**

(表)
山田光春兄

お手紙有難う。
僕はたいへんうれしかつた。
しかし君も病氣をしたことをよむとやはりすこしくらい氣持にさせられた。
無理をせぬ様。
仕事も時々さばられて休息される事をのぞみたい氣持になりました。
僕は完全に昔とをりといふまでにはゆかぬが、エをかくのにはさしつかえありません。
材料はこちらもまつたく手に入りませんが、あと100、80、をかくぐらいあります、ホワイトは自分でネツてゐるのでいくらでもあるわけです。
おかげで畫が白ぼくなつてこまる。
杉子は京都に一人でカンバツてゐます。
どこかつとめてゐるら



**書簡97 1946年5月22日 葉書、横書**

**表：名古屋市北区／杉村町三ノ二八／山田光春兄／宮崎市南広島通三／杉田秀夫**

皆さんお元氣ですか

すつかりごぶさたしちやつてすみません。

名古屋の方は文化運動はどうか、こちらは25日からんらん會〔註1〕をやる

50人ぐらい會員になつてゐる（縣全たいで）勿論コンミニストがフラクション活動をやつてゐます。

こちらも黨員はふえますが組織はあまりのびない。ケイモウ運動及文化運動の必要をかんじてゐます。君はまだはいりませんか?マダムよろしく

〔註1〕新宮崎美術協会展。同会は共産党系の宮崎民主主義文化連盟の分化として日高二三夫、瑛九らによって1946年3月14日に創立し、5月25日から第1回展を宮崎マーケット階上にて開催（『日向日日新聞』1946年5月26日2面に記事あり）。瑛九はこの年の1月末頃共産党に入党したが、6月中旬に離党。

**書簡98 1949年4月2日 封書、便箋2枚、横書**

**表：愛知縣名古屋／東局区内／新村町三ノ二八／山田光春様**

**裏：宮崎市丸島町一／丸島住宅131／杉田秀夫**

(1枚目)

光春兄

お元氣ですか。

久保貞次郎の手紙で君が眞岡に行ったことを知つた 手紙を書こうと思ひながら今日になつてしまいました。北尾さんのすすめもあつたし僕も發表慾がわいてきたので自由展に出品することにしました。

君は5月の連合展〔註1〕には出品しますか、そして上京しますか。僕は個展〔註2〕もけいかくしてゐるが、身体とケイザイ状態にかかつてゐる。そのてん自由展で發表すれば手軽だと思つたのですがまとめて發表するためにはどうしても個展によらねばならぬと思ます。

宮崎では新聞社主催にして縣展の組織に手をつけてゐます。よいエカキはあいかわらず生まれませんが、これを機にすこし指導したいと思つてゐます。

(2枚目)

君は圖畫教育の方に専心してゐるのですか、これはもつとも重要な問題の一つです。北川民次〔註3〕はエバかりかかいてるのでせう。最近は。

長谷川三郎は4月から東京に出る予定だといつかかいてゐたからもうつつてゐるでせう。

小野里利信もかえつてきて、手紙によると身体だけ元氣で精神は低調の様だ。

僕は出来るだけエをかきたい。収入がないのでコウエンにい

つたり地方新聞に原稿かいたりしてゐる。こんな仕事をするのなら東京にいたら都合がよいのだが、しかし東京の社交的なフンイキを想像するとうんざりしたりしてゐる。どうでもエノグ代にもつまつてきたら上京して働くつもりです。

エスペラントもやつてゐます。戦後僕のコ軍フロントウで、地方エスペラント会では日本でも有数な会になつてゐます、パリヤストツクホルム、イタリイ、チエツコ、イギリス、アメリカのレン中と意見のコウカンをすることは田舎生活の唯一のなぐさめです。

Q

〔註1〕第3回美術団体連合展（毎日新聞社主催、1949年5月14日-6月5日、東京都美術館）。

〔註2〕この年には個展は実現していない。

〔註3〕北川民次（1894-1989）洋画家。静岡県生まれ。1914年に渡米してアート・スチューデント・リーグに学ぶ。1921年にメキシコに移り、1936年まで美術教育に携わる。帰国後は二科会員となる。1938年6月に、児童画を集めていた久保貞次郎の訪問を受け（書簡68、69参照）、以後親交を結んで1952年に創造美育協会を結成するなど久保とともに美術教育に大きな役割を果たした。

**書簡99 1949年5月13日 葉書、横書**

**表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春様／宮崎局区内丸島住宅131／杉田秀夫**

毎日展〔註1〕には出品しましたか?僕は20号2でんだした。山口〔註2〕にたのんで。山本カナエの本は郡司においてあつてやいた。古本屋をさがしたが今迄ではみつからない。みつけたら送ります。

今僕はエスペラントをつうじて十数ヶ国に友人をもつてゐるが、君の方で日本の子供のエ（日本の生活のよくてたやつが）手がるにあつめられる様ならお願いしたい。

→モシ送つてもらえるなら年（子供の）だけはぜひかいてくれ。

すこしコウカンしてみたいと思つてゐるのです、教師のエスペランチストはわりに多いから。僕はこの文通をつうじて日本を客観的にみる力を得つつある。これは予想外のしうかくだよ。僕は外国の生活を知るためにはじめたのだが、僕自身が批判のたいしようとされるわけだし、日本人として日本についての知しきをようきうされる。

〔註1〕書簡98〔註1〕の美術団体連合展をさす。

〔註2〕この時期、自由美術家協会には山口姓の会員が3人いる（山口薫、山口正城、山口英哉）が、ここで言及されているのは、おそらく山口薫（1907-68）と思われる。書簡103も参照。

**書簡100 1949年8月12日 葉書、横書**

**表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春様／宮崎市丸島住宅131／杉田秀夫**

夏休みで制作の事と思ひますが、皆さん元氣ですか。

僕も久しぶりで朝から晩まで制作してゐますが、たちまちにして材料が不足するのに感心してゐます。

思ひきつて勉強するためにはよほどむつかしい時期ですね。先日北尾氏から手紙をもらつたがなかで君の作品と荒井〔註1〕の作品を非常にほめてあつた。うれしかつた。

僕は今夏からまつたく出なをしといった感じになつてゐる。いままでの中途半ばな生活（畫に對しての）がひどく自分をそこなつてゐるのをつうかんしてゐます。勇氣、つねに勇氣が必要です。

新しい表現には新しい技術が必要なのは自明のことながら、勇氣の不足からつねに中とハンパにをわし●てきました。その點長谷川氏の仕事がみたいと思ふ。

〔註1〕荒井龍男（1905-55）洋画家。大分県生まれ。自由美術家協会会員。1950年、同会を脱退してモダンアート協会を結成。

**書簡101 1949年8月17日 封書、便箋1枚(両面)、横書、写真1枚**

**表：名古屋市北区杉村町三ノ二八／山田光春兄**

**裏：宮崎市丸島住宅131／杉田秀夫**

(図3：写真)

(写真裏書き) 僕と妻とエスペラントをやつてゐる僕の友人達



図3 後列左から2人目が瑛九、前列左から2人目が瑛九の妻の杉田都。

(49、7月)

(表)

17日夜 8月

手紙 14日受とりました。その夕からこちは又嵐だ

そして16日の夜明までつづいた。そして雨がつつき今日の午前中はコウ水でもあるのではないかといふせとぎわでやんだ。しかし市外では軒まで水にひたつた所もある。嵐の中で一度返事をかいたがうまく行かなかつたのでよした。本とエをあめもりからふせぐためにずいぶんくたびれた。我々の住宅が（せんさい者住宅だが）いつもいちばんひどい目にあふのだ。

戦と病氣とけつこんをつうじて僕はずいぶんかわつて行きつつある。

自由展には北尾さんのすゝめで入会〔註1〕してレン合展にでしたが、秋はいつからあるのか?それについて20日ばかり前山口にといあわせの手紙をだしたがいまだに返事をうけない。僕は日本的なあいまいさに次第に調子があわなくなつて行。戦争と病氣は僕をアイマイサの中にひたしたが、エスペラントとけつこんが僕の方コウをすこしづつめいかくにして行きつつある。兄のやつてゐること、僕ををいたした事も彼自身ではじつにあいまいなのだろう、しかし事實としてそれははつきりそうあらわれてゐる。僕は久保貞次郎と文通してみても彼の日本的あいまいさが僕をしぼしばとうわくさせるのを感じだした。

小野里はまつたく昔のまゝだ、だからもう彼は僕が事務的に度々とひあわせる生活について返事をくれることがなくなつた。

僕は今僕のシユウ中にあつまる青年たちとどんな話するか。

僕は酒や映画をみることにはんかんをもつてその金で本をか

ふような人々を愛してゐる。コウファンとだらしのない人々はコムニストにも多いのおどろいてゐる。ドイツの青年がかいてゐる手紙の中で、僕はすでに数年映画をみない、僕は勉強しなければならなし自己をたのしませるためには遠足や合唱があると。僕は日本の今この様な風な考へを何か馬鹿げた事のようにするのをよくみうける。僕の兄などその最たるものでしてそいつらはつねにゲラゲラわらふ。

（裏）西洋映画をみることを最大のきょうようとして　そしてさけをのみおたがいにほめあつてゐる。僕はパリに一人　労働者の友を、地方に2人　一人は女の教授（ロシア、ドイツ　エイゴの）たの一人は本のとりつきはんばいをしてゐる。イギリスの夫人、オランダの教員、及ピアニスト、工場労働者、チエコのコミニスト、ノルエーのぞうせん技師、スエーデンのホテル事務員、工場労働者、イタリのベンゴ士、他フィンランド、ポランド、ユーゴー其の他いるが、彼等が一人として映畫にたいする一字もかいてきたのをよんだことがない、僕はいくどかかいてみたが、僕の妻の文通者はアメリカにゐるが、彼女等でもそうだ。

日本のダンス、映畫、ベースボール、このとはいつたい何を意味するのだらう。そして共産党と前エイ繪畫とくるのではないだらうか。

僕はどうかでなく一心にヨオロツパ人と文通をしてゐる。誠實にやれば彼等も又それにこたえる様に思ふ。僕は世界的な市民の自覺をもちたい。彼等はあいまいな事はあいまいなりにはつきりかく。

ヨオロツパが日本に好意をもつてゐないことはたしかだ。そしてそれは正しいと思ふ。それから彼等は日本人の様にセクト的政治狂ではない。

彼等はエイ畫やベースボールをみるだらうが、それはかくにあたいする程のものでなく、すくなくとも彼等の生活の中でそれは日本の様なギチをしめてゐないのだ。

ケイザイ的なコンクケツボラは僕を一時は弱めたが、今では二人とものりきるけいけんをもつた。僕達は今月にいつて一回もフロ屋に行かないが、それでもせいけつにくらしてゐる。僕達のたたかいかたわこんな風だ。タバコはハイキウ以外かわず菓子やアイスキャンデーを口にした事はないが、希望にふくれてゐる。しかし僕はしばしば病む。君か病氣であることをきいて、僕は僕がけいけんした周年の日本的人情のセンパクさを思ひ出す。君はそれをケイケンする程長くヤマずにかいふくして宮崎をほうもんしてくれることをねがふ。

日本的な現在のエゴイズムとキョウラク主義とコウファン性感激をすてないと日本人はクワイフすることは出来ないのではなからうか。

僕の心からのあいさつを君の家族の方々え時計をみたら3時半だ、嵐のためにすつかり不規則になつてしまつた。



図4

たたみのあげたまゝのへやで。
Q. Ei
（欄外）郡司盛男〔註2〕は東京にいつた　龍村氏の所で働いてゐる。

〔註1〕 瑛九は1941年に美術創作家協会を退会していたが、戦後、設立当初の自由美術家協会として活動再開していた同会にこの年の3月に復帰、書簡98の第3回美術団体連合展に《窓を開ける》《鳩》を出品していた。

〔註2〕 郡司盛男は瑛九の長姉・君子の長男。

**書簡102　1949年10月19日　封書、便箋1枚、絵葉書1枚、横書****表**：左記へ御回送下さい／愛知縣西加茂郡小原村／三ツ久保二二八／山田義秀様方／山田光春様**裏**：宮崎市丸島住宅131／瑛九**絵葉書**：第十三回自由美術展出品　出發　瑛九（図4）

山田光春様けんこういかがです。秋には宮崎にやつてくるだらうとまちつつ君からあまり便りがないので又かきます。僕達も12月末頃までに（すべてが予定どおり行けば）東京にうつることにしました。貧乏をだかいし、充分畫を描くためです。2、3の友人が中心になり後援会をつくつてくれ20-23日まで個展〔註1〕やります。

病中　戦争中にかいた自然主義的なエとアブストラクトを一緒にならべます。すこしユウチヨしたが、アブストレはうれる見込がうすいのでこうしました。ぜん力をあげてジユンビしてゐます。僕はこれに勝つことさえ出来ねばとても東京生活にうちかつことは出来ないとよくしつてゐますので、全力をあげてゐるのです。

自由展には4点だしました〔註2〕。自由展をみた小林まつ女史

からおもいがけない手紙をもらつた。彼女は“君はどうして出品しなかつたか”としつもんしてみたので、僕も君の健康がわるいのではないかと心配してゐます。戦後時々おもいがけない手紙を古い知人や友人からもらうようになった。しかしこれはうれしい事の一つです。

名古屋の連中で自由展出品者は多いですか。郡司君も東京にゐますが、宮崎での生活があまり温室だつたのですこし悲鳴にちかいネを上げてゐます。どこでも、いつでも人間は全力をあげて生きねば成長もカン喜も希望もうまれないのではないでせうか。もし君のケンコウがユルしたら瑛九論5-6枚（もつと長くてもみぢかくてもいい）かいてくれませんか、個展を機に瑛九後エン会からパンフレットを出す予定です〔註3〕。東京の友人達にもたのんだがどれだけあつまるか、心配してゐます。君は1号どれくらいでうつてゐますか？僕の方千円ぐらいの見とうでないともつかしいといふ人々の意見にしたがつています。僕の後エン会には君の舊知は一人もいない。時代はかわつたと思ふ。

君は上京しなかつたのではないかと思ひ
瑛九
僕のエハガキー一枚入れてみます。

〔註1〕 瑛九氏作品展（1950年2月11日-14日、宮崎県教育会館）をさすものと考えられる。

〔註2〕 第13回自由美術家協会展（1949年10月9日-27日、東京都美術館）に瑛九は《正午》《街》《コレスポンド》《出発》を出品。

〔註3〕『芸術家瑛九』（瑛九後援会、1950年1月）。長谷川三郎「瑛九の絵」、久保貞次郎「瑛九の絵画」、北尾淳一郎「芸術家としての瑛九」、外山卯三郎「瑛九の芸術について」を取録。

**書簡103　1949年11月26日　封書、便箋2枚、横書****表**：愛知県小原局区内／三久保／山田光春様**裏**：宮崎市丸島住宅131／瑛九

（1枚目・表）ハガキで君は名古屋にゐないことをしつておどろきました。くれぐれも身体は用心して下さい。僕も何年間を小康と重たいをくりかえしましたが、今でもやはりすこし食事や仕事の無理をするとわるくなるのですが、この頃では大分このじよう態を普通とみるようになりました。君のぼあいは僕より家族が多いから色々心配も多いことと思ひます。いきなり元氣になりたく思わず、無理をしない様願ひます。小林まつ氏からその後又たよりがあり、僕の小品をかつてくれました。戦前はじめてあつたとき一枚工をくれといわれ、その時一枚のスケッチ板をやつたのですが、彼女はそれをつつと大切にしてゐたらしい、しかし戦争でやいてしまつたので、又ほしくなつたといふのです。それで僕は舊作の中から一枚海・3号をガクブチに入れ、他にアブストラクト3号一枚そえて送りました。（彼女はアブストラクトはよくわからないといふのですが、

これは無理にこちらからそえておきました。彼女は五千円お送つてくれました。そしてたいへんすまないが、君の小品もほしいのだが、ゆづつてはもらえないか、僕からきいてくれといふのです。やはり5千円ぐらいまでなら出せますといふのです。僕はうっかり、きつと山田君もよるこんであなたの申出をうけるでせうと僕かいて返事をしたのですが、あとでしかしこうかいたのはケイツではなかつたかと思つたりしています、しかし彼女は僕をとをしてきいてみってくれとかいてゐるのです。僕としては君も病氣つづきだからすこしでも金はいつた方がよいと思つたのです。僕は彼女が学校の教師をし母と妹をやしないながらその中でよく繪をかふ氣持をもつてゐるのに感心してゐます。

（1枚目・裏）僕は君に僕の個展の事はかいたかしら？11月にやるはずだつたのを1月にのぼしたのです〔註1〕。いきなりやつても仲々エはうれないといふ理由からです。瑛九後援会の發企人には20名ばかりなつてくれましたが、この人々がはたしてどのてい度かつくれるかわかりません。うるのには僕の舊作の自然主義的な畫があてられます。→個展は20年間の作品でぐうぜんのこつたものから近作までですが　中心はアブストラクトになるでせう。

これは久保氏の所でクボコレクションをみながら研究的にかいたものや大原のメモみたいな一連です　うるのにはてきとうではありませんが、エとしてはわりによいので、いくらかうれると思つてゐます。ネダンは一号千円としてゐますが、いくらかこれより安めにうることになりそうです。名古屋では普通いくらぐらいでうつてゐますか？

まえに君にもたのんだ僕のパンフレットの原稿はエカキには君の外　山口、長谷川、二人にたのだが長谷川氏からは何ともたよりなし、山口氏からはよつばらつてかいたらしい實にへんでこりんなものをもらい〔註2〕、僕もぼをぜんとしました、彼がこんな氣持で僕とつきあつてゐたのかと思ふと僕は一時ウウウツになりましたが、世間の人の僕にたいする考はみなこうなので彼も世間なみに僕をみてゐたといふにすぎないのかもしれない。

画家以外の人々は僕はとてもひきうけてもらえぬと思つてゐた人々まで引うけてくれて、僕は僕にたいする彼等のキタイのためにでも努力しなければいけないと思つております。宮崎では僕は1人の信頼する老画家を發見してよるこんでゐます。彼はタイワンに終戦までゐたんでゆわゆるタイ展をソシキシそだてた人です。塩月氏〔註3〕といふ人で、君の先生だつた伊原氏は彼の弟子だつたらしい。梅原氏とはかなりひたしい人ですが作品も立派だし生活たい度も立派で僕はしばしばおしえられる所があります。宮崎がうんだ唯一の先輩画家といえるでせう。生活のケウキさえなければ僕も宮崎にゐても塩月氏がをる以上　藝術上さびしくはないような氣もしてゐます。しかし生活は仲々つらいし、内職はないので上京をけいかくし

たのです。塩月氏としたしくなつたのもごさいきんなのです。

(2枚目・表)
東京も山口氏の小文などよむと(せつかく信頼してゐる少数の友と思つてゐただけに)すこし興味がうすくなりました
山口氏あたりでもこんな風なものをもつてゐるのでは他の画家は、といった感想があるのです。それから最近てらんん会の時出した自由美術〔註4〕を手にしてよみ、画家達が誠實からかなりはなれた空気でしゃべつてゐるのも僕をユウウツにします。彼は僕の田舎での個展のための小文に僕が自由展をやめたりはいつたりした時のことをかいたり僕の作品はすべてわすれたとか、今度のは北尾氏が一枚以外はわからぬといったとか、とにかく四十にもなるのだから妻君をカワイがつて赤ちやんでも作れとかいつた風なのです。はじめてあつた時の印象はテラツてゐる若者とかいたたぐいです。君はどををもちます、これは友情からする個展前の僕への小文として　つかえるでせうか、日頃からの彼の寛大な温情からして僕はまつたくフにおちず、僕だけがきづきあげてゐた彼えのそんけいも夢の様な氣がします、ハンシンハンギで僕は誠實に一おう僕の氣持をかいて返事をしておきました。

戦争をつうじてしかし人々の心はふかいさいぎ心と不信の中に泳ぐようになりましたね。かなしいことですが、やはり理性的であることがこれにかつ唯一の事の様に思われます。久保君は實にフカイ温みにあふれたしかし客観的な彼の態度をうしなわぬ立派な原稿をかいてくれました。彼のフカイ理解とするとどい批判は僕をどの様にふるいたたせてくれたことでせう。彼はかなりしんけんに僕を論じてゐます。

僕等の古い仲間もつとも困難な時にあたつて、それぞれにツケヤキパのはけて行く時節にきてゐると日日思ます。しか僕はどこまでも誠意をもつてすべてにそつ直にあたつて行く決心でゐす。

(2枚目・裏)
ついちよつと小林さんの事で君にといあわせるつもりのが長くなりました。

いつごろまで君は小原にゐる予定ですか。

僕はすこしづつ制作が機ドウにのりつつあるのを感じます。君の生活をなくさめる様だつたら近作のデツサン、スイサイ送ります。シゲキにしてわるいかもしれませんが。すこしヨハクがあるのですこしまた　むだ話をかきませう。海外ではベルギイにさいきんよい友を發見しました　彼は職業は下士官にすぎないのですが、その知しきのひろさと人間性の豊さに心うたれてゐます。彼はブルゲエといふベルキの中都会にすみ、パンエイクやチエラール　ダウイド、ヴルデル、ゴーエス　メモリンクの作品の中でそだつてゐるだけに繪畫についてもうらやむべき愛情をもつてゐます
メモリンクもヴアンエイクも彼の街で生き描き死んだのです。

だから街は多数の彼等の傑作をもつてゐるのです。又ベルギーのオステンドで近代繪畫のてらんん会が今年あつて、シアガアル、キリコ、クレー、ダリ、マテイス、エルンスト、ヒカソなどのけつさくと現代ベルギがほこる世界的な画家(ジエムス　アンソール)と共にならべたそうです、そのてらんんかいにはマックスエルンストがわざわざほうもんして、会場における彼の寫眞の新聞キリヌキをくれました。

僕のベルギーの友は近代繪畫より古典がすきで、しかもそれを、過去に傑作をもつ国の人間の保守性、をみづからみとめてゐます。文學に関しては繪畫以上に世界の文學に目をとをしてゐます。彼は5ヶ国語ぐらい自由に出来るのです。それで彼は34なのですよ、彼の妻もエスペランチストで二人の子供はうまれた時からエスペラントをはなすようにそだててゐるそうです。人間味あふれた家庭の寫眞を何枚か送つてくれました。では又　時々は手紙を下さい。おくさんは名古屋ですか?どうかよろしく　僕と僕の妻のあいさつをおつた下さい。

君の健康のことをつねにかんがえなら、君の古い友　Q. Ei

〔註1〕 書簡102の〔註1〕を参照。

〔註2〕長谷川三郎はこの書簡の後「瑛九の絵」を寄稿。山口薫の文章は結局、掲載されなかった。山田光春『瑛九　評伝と作品』(青龍洞、1976年、305頁)を参照。

〔註3〕塩月桃甫(1886-1954)画家。宮崎県生まれ。東京美術学校卒業。1921年台湾に渡り美術教育に携わり台湾の美術振興に努めた。1946年帰国し宮崎を拠点に活動。1962年「瑛九、塩月桃甫遺作展」が宮崎県立図書館で開催された。

〔註4〕『自由美術』6号(1949年10月)と考えられる。ここに収録された会員の座談会は以下の四つ。佐田勝、井上長三郎、鶴岡政男、大野五郎、佐藤溪、昆野恒、吉井忠、堀内規次「三つの話題」、林田重正、森芳雄、難波田龍起、野見山曉治、手塚益雄、富成忠夫「リンゴの氣持はわからない——民主主義繪画をめぐるつて——」、荒井龍男、朝妻治郎、小松義雄、勝田寛一、村井正誠、水谷武彦、中山次郎蔵、小川孝子、山口薫、山口正城「これからの絵は」、北垣正樹、K・N、中村真、田中健三、登崎太三郎「現代繪画の写実」。

**書簡104　1949年12月17日　葉書、横書****表：名古屋市北区杉村町三ノ二八／山田光春様／宮崎市丸島住宅131／瑛九**

早速御返事有難う
小林氏の住所は
新潟県興枝町　興枝高等学校内
です。
山口から返事をもらつた　彼も色々となやんでゐる様だ、僕の率直な手紙で僕の氣持が充分わかつてくれたので僕もうれしかつた。
長谷川は藤澤市にひつこした、だいぶ多忙だつたらしい　原稿もぎた。

君えはもちろん前便でお願いした、もつとも僕は君は病氣だといふので僕はそれでふたたびたのむのはよしたのだが、君はあの

手紙をよまなかつたらしいね。もう刷さつにまわすので、又別の時君にはかいてもらをう。パンフレット出来たら送ります、外山、長谷川、久保、北尾、すべて力作で僕もすこしおどろいてゐる。
ジユンビのためにスデニ3枚うつた。号千円から千五百円ぐらいだ。時きがわるいわりにはよい共力者のおかげでうまく行くと思つてゐるし、又やつつけるつもりでいる、といふと元氣がよさそうだが昨日から又僕もネコンでゐるのだ。しかしたいした事はない。先日エビ原喜之助氏〔註1〕がきて近作をみてくれて親身なゲキレイをうけてうれしかつた。今彼は人吉とい所にすんでゐる。

〔註1〕海老原喜之助(1904-70)洋画家。鹿児島県生まれ。1923-34年渡仏、帰国後は独立美術協会会員。戦後は熊本県を拠点に活動。

**書簡105　1950年4月25日　葉書、横書****表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春兄／宮崎市丸島住宅131／瑛九**

お元氣ですか
ごぶさたしてしまいました。
個展がすんだら僕はすつかり制作慾にとりつかれてすこしつめて仕事をしてしばらくねこみましたが二、三日前から元氣になつて又仕事をはじめてゐます。
上京はいまの所みあわせてゐます。生活がこちらでも出来るそうなのと、なにより今の制作慾に身をまかせたいからです。毎日連合展〔註1〕には25号を出します。君はできましたか
返事をまつてゐます

〔註1〕第4回美術団体連合展(毎日新聞社主催、1950年5月14日-6月7日、東京都美術館)に瑛九は《少女》を出品。

**書簡106　1950年8月21日　封書、便箋2枚、縦書****表：名古屋市北区／杉村町三ノ28／山田光春様****裏：宮崎市丸島住宅131／杉田秀夫**

(1枚目・表)
山田光春兄
おてかみ　うれしく拝見しました。君の健康のことを氣にしながら御無沙汰してしまいました。僕も手紙をかこうかこうと思つてゐるうち君から元氣かいふく(すくなくともエがかけるぐらい)のことをきかされて僕も勇氣が出ました。
僕は個展後ホトデツサンを二百枚ぐらいつくりました　連合展ごろ上京する予定でゐたのですが、ねこんでしまい機會を失し又それから制作をはじめてこちらにいます。
自由展分レツ〔註1〕の事は僕もよみうりの記事でしつてゐるだけで何等の報告も相談もうけてゐません。しかし僕は自由展に出品するつもりでゐます。長谷川兄がゐる以上　会はしようめつしなと思ひます。

だつたい者は八名で前々から一つのグループをなしてゐたのですからけつこうだと思つてゐます。
今の所僕としては関心はあまりありません。藝術は個人の仕事ですから会はしんさうけぬで發表出来る会ならよいと思つてゐるのが最近の僕の考へです。

(1枚目・裏)
フオトデツサンは海老原喜之助がたいへん感激してくれて、發表しろといふすすめで四十枚ばかり東京植村〔註2〕あてに送りましたが、二月月ばかり立つたが何ともいつてこないなので、僕もいまのジアナリズムにあわなくモクサツなのかとあきらめてゐますが、僕自身としては色々面白い發見もあつたつもりです。秋がきたら又ホトデツサンもつくります。
僕は自由展の作品はもうできてゐます、いまから僕のグループ(郡司や太佐もはいつてゐて十二三名　宮崎自由美術クラブといふのです〔註3])主催で観光洋畫展を縣の観光協會バス會社朝日支局後エンでやるためにじゅんびしてゐます。これはじゅんぜんたる應用美術とて各自が生活ヒの一助にするためにやるのです。僕も本氣で描くつもりここからけいざいの以外に繪畫的な發展もあるつもりでいます。
君の自由展の制作を心からきたいしてゐます。
今年は僕も見に行けるだらうと思つてゐます。

瑛九
(2枚目)
手紙をかき終つて封をしようとしたら北尾淳一郎氏から長文の速達がきました。

8名の退会はとつぜんで会とのレンラクなしにおこなわれた由、会は今まで通りやる由です。色々と氏の見解がかいてありましたが、氏は長谷川兄を信頼してつて行くといふことす。
会員が多すぎてどうかとは思つてゐましたが、だつたい者は少数でもとの自由美術の様なものをつくるつもりなのでせう。彼等にはその方よいものがうまれてせう。

〔註1〕『日本美術年鑑』1947-51年版、美術研究所、1952年2月、39頁の「美術界五年史」昭和25年8月の項には以下の記述がある。「自由美術家協会から荒井龍男ら脱退　自由美術家協会会員荒井龍男、朝妻治郎、小松義雄、村井正誠、矢橋六郎、山口薫、植木茂、中村眞は新団体を結成するため六日同会を脱退した」。また40頁の同年9月の項には「モダンアート協会結成　さきに自由美術家協会を脱退した荒井龍男、山口薫ら八名は新たにモダンアート協会を結成した」とある。

〔註2〕美術評論家の植村鷹千代(1911-98)と考えられる。植村は瑛九のデビューに際して『みづゑ』375号(1936年5月)に「意識の絵画の発足　瑛九のレエゾン・デエトル」を執筆し、また1951年1月の宮崎での『瑛九フォト・デッサン展』目録にも寄稿している。

〔註3〕宮崎自由美術クラブは瑛九を中心に内田耕平、郡司盛男、松本静太郎、藤田穎男、外山弥、太佐豊春らにより結成され1950年5月に第1回展を開催。

**書簡107 1950年9月24日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区／杉村町三ノ二八／山田光春様／宮崎市丸島住宅131／瑛九**

せいさくは進んでますか？
しんさには出席しますか
もし出席すればこちらから郡司君と内田耕平君が出してゐる〔註1〕のでみて下さい。それから入選したら グン1(1点なら)ウチ2(2点なら)といった風に電報うつてもらえませんか。君出席しなければ一報下さい
他にたのみますから
彼等は非常にまつてゐますから。僕達は18日に送つたんです。僕はこちらの展らんかいのジユンピと新しくホトデツサンをつくるジユンピを始めたのでゆけません。太佐君がこの月末児童画のことで久保氏をほうもんする由で自由展をみるといつてゐます、もし君にあえたらよろこぶでせう。彼も出品の予定でゐましたがだめでした。僕のホトデツサンも久保氏の助力で日の目をみそうです
会期まだ不定です〔註2〕、会の事ムは朝妻君がやつてくれるそうです。
では又

〔註1〕第14回自由美術家協会展(1950年10月10日-27日、東京都美術館)に郡司盛男は《散歩》《散步》、内田耕平は《湖のある風景》を出品。

〔註2〕10月10日-15日に「瑛九フォト・デッサン展」(上野松坂屋)として実現。

**書簡108 1950年10月20日 葉書、縦書**  
**表：名古屋市北区杉村町／3の28／山田光春様／東京にて／二十日／瑛九**

ジャナリズムの流を無視したのとジユンピ不足の僕の個展は完全な失敗におわた、画家諸君すら少数しかみにこないのでおどろいた〔註1〕。
大阪展〔註2〕でなんとかばんかいしようと思つてゐるので、君の所へ行く予定はたちそうもありません
こちらで色々の人にあわねばなりません
今度はだからお許下さい。
健康はいかがですか。

〔註1〕個展の批評としては、この書簡の後、植村鷹千代「瑛九フォト・デッサン展」(『美術手帖』37号、1950年12月)および久保貞次郎「瑛九のフォト・デッサン」(『みづゑ』542号、1950年12月)が執筆された。

〔註2〕瑛九フォト・デッサン展、1951年2月23日-28日、大阪、梅田画廊。

**書簡109 1950年12月29日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区／杉村町三ノ二八／山田光春様**

其の後すつかりコブサタしました。
僕もかえつてからすこしつかれてしばらくネコミました。君のけんこうが氣になるのでハガキします。東京の君の印象がヒゲのせいいたいへんつかれてゐる様に見えて……。

其の後すぐ大阪でも個展やる予定が出来ず、1、11-15まで宮崎でやります〔註1〕、大阪展のためでしたがプロ別送します、そう入のフォトはかえつてからつक्तたものです。
いろいろと雑用にもまれながら仕事病氣とくりかえしてみると時間の早いのにあされる。君の健康をいのりながら。

〔註1〕瑛九フォト・デッサン展、1951年1月11日-15日、宮崎市商工会議所。

**書簡110 1951年2月10日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春様／宮崎市丸島住宅131／瑛九**

返事おくれてすみません
僕も馬鹿げて多忙な日々をおくつてゐるので、君にきてもらうのがいつごろがよいのか考へてゐます
2月23-28日 大阪梅田畫廊で個展〔註1〕をやります
4月 勝田と二人で大阪市美術館〔註2〕
6月 新グループ(大阪中心)展〔註3〕
その他東京グループを作つたのでこれも4、5月にやる予定
それと新作個展も(東京)でけいかくしています
3月は宮崎のグループ展
4月は商業美術展などけいかくしてゐるのです〔註4〕
君は4月の新學期から出校されるのでせうね
僕は2月21、2日頃大阪着の予定です
都合では東京まで行きます

〔註1〕書簡108の〔註2〕を参照。

〔註2〕瑛九・勝田寛一展、1951年4月8日-17日、大阪市立美術館

〔註3〕第1回デモクラート美術展、1951年6月16日-24日、大阪市立美術館

〔註4〕上記〔註1〜3〕以外に列挙してある計画については、実現は確認されていない。

**書簡111 1951年9月29日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区／杉村町三ノ二八／山田光春様／浦和市仲町五の一九一／関口方 瑛九**

本當に長い事ごぶさたしてしまつて申わけありません
今度ようやく移轉を實行しました〔註1〕
部屋ガリですが暗室をもつてゐる家なのでべんをしのんできめました
浦和駅からは近く、上野までは30分位で行けますからわりに便利です。
色々といけいかくもありますが、まだおちつけません
貴兄の方 畫室どうなりましたか、こちらにきてまだ誰にもあつてゐません。

〔註1〕瑛九は1951年9月に埼玉県浦和市仲町5-191に転居。

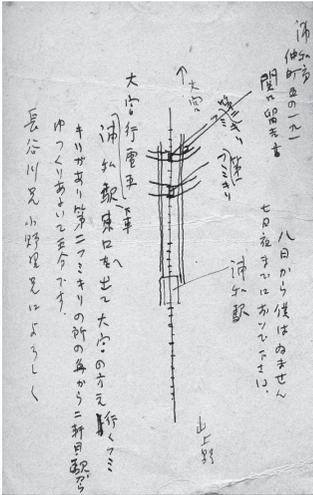


図5

〔註1〕第17回自由美術家協会展(1953年10月9日-26日、東京都美術館)に山田光春は《小鳥をのんだ蛇》《小鳥を描捕る人》を出品。

**書簡114 1954年5月18日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春兄／浦和市本太五の44／瑛九**

八日から僕はゐません
七日夜までにおいで下さい
浦和市仲町五の一九一
関口留吉
(図5：地図)
大宮行電車 浦和駅下車東口へ出て大宮の方え行くフミキリがあり第二フミキリの所の角から二軒目、駅からゆつくりあるいて五分です
長谷川兄小野里兄によろしく

**書簡113 1953年12月30日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春様／浦和市本太五の四四／瑛九**

すつかりゴブサタしてしまいました。
お元氣でかつやくの事と思ます
今年の自由展〔註1〕でひさしぶりに君のエをみました。昨年は家内が病氣で(1年近く)みに行けませんでした。僕はエツチングをつづけてゐます。それでいつか久保氏から君達が名古屋でプレス機をつくらせるといふ話をきいたのですが、つくらせてゐますか、つくらせてゐれば大きさとネダンを知せて下さい
若い友人達の間でつきつぎとやつている人がいるのですが、プレス機がどうもかんたんに入手出来なかつたり高すぎたりしてゐるので、君達の方でつくつてゐればそれをと
思つたのです。君達の方のグループのエッチングの状態おしらせ下さい。
新年おめでとう

奥様によろしく

〔註1〕第17回自由美術家協会展(1953年10月9日-26日、東京都美術館)に山田光春は《小鳥をのんだ蛇》《小鳥を描捕る人》を出品。

**書簡115 1954年5月22日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区／杉村町／三ノ二八／山田光春様／浦和市本太5-44／瑛九**

(宛名面)
君がエツチングをやつたらきつと若き日のガラスエでやらうとしたことがもつとジツクリ適切に実現するのではないかとキタイしてゐます。

(文面)
早速返事有難う。運賃の外は招待状はどうなるだらうか。出来ればこれも畫廊の方にもつてもらいたいのですが、それから作品はレンブラントからにしてもよいとこの前久保氏と話したのですが、6月末に桐生市でやる予定です。ですが同時かちよつとづれるぐらいでよいですが会期の方は作品が多クさんあるからどうでもなるでせうが7月5日ごろから久保氏は9月初めごろまでは軽井沢なので、この期間に作品ヘンセイはダメでせうね。畫廊主人と久保氏でその所こうしようされるのがよいでせう。エツチングプレスは今の所東京では東京都杉並区高円寺3ノ180 日本全国版画協会 関野準一郎氏です。小ガタガ6千5百円だつたと思ます。それから 東京都中野区新山通3ノ22 日本教育版画協会といふのが雑誌「教育版画」といふのを出していますが、君の方にはおくつてきてゐますか。

〔註1〕日本前衛版画展、1954年6月26日-28日、桐生織物会館。

**書簡115 1954年5月22日 葉書、横書**  
**表：名古屋市北区／杉村町／三ノ二八／山田光春様／浦和市本太5-44／瑛九**

(宛名面)
君がエツチングをやつたらきつと若き日のガラスエでやらうとしたことがもつとジツクリ適切に実現するのではないかとキタイしてゐます。

(文面)
早速返事有難う。運賃の外は招待状はどうなるだらうか。出来ればこれも畫廊の方にもつてもらいたいのですが、それから作品はレンブラントからにしてもよいとこの前久保氏と話したのですが、6月末に桐生市でやる予定です。ですが同時かちよつとづれるぐらいでよいですが会期の方は作品が多クさんあるからどうでもなるでせうが7月5日ごろから久保氏は9月初めごろまでは軽井沢なので、この期間に作品ヘンセイはダメでせうね。畫廊主人と久保氏でその所こうしようされるのがよいでせう。エツチングプレスは今の所東京では東京都杉並区高円寺3ノ180 日本全国版画協会 関野準一郎氏です。小ガタガ6千5百円だつたと思ます。それから 東京都中野区新山通3ノ22 日本教育版画協会といふのが雑誌「教育版画」といふのを出していますが、君の方にはおくつてきてゐますか。

**書簡116 1955年10月17日 葉書、横書**

**表：名古屋市／北区杉村町三ノ二八／山田光春様／瑛九**

おハガキよみました。

あれからまもなく家内が入院してこたごたしたのですが、エツチングプレス社の方にはきてくれといふ手紙したのです。福井の方の講習[註1]も決定したので、あなたの方と二つの用事をかねているのに今日まで返事がありませんし、本人もやつてこない。そんなわけですからプレス器がつかうのはちよつとお願いすると思つてますがまつて下さい。二三日内に家内も退院することと思つます

君は会期の終りごろ上京するのですか？いそがしいでせうか！泊る様ならきて下さい。それまでには話をつけておきます。洗面道具の中のカガミはわかれると思つてこちらにとつておきました。

[註1] 創造美育協会主催の版画講習会が1955年11月に福井で開催された。

**書簡117 1955年11月24日 葉書、横書**

**表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春様／浦和市本太5-44／瑛九**

エツチングの方ですか

僕は12日-18日迄福井で版画講習にさんかしました。君のエツチングどういふ風になつているだらうかと思ひながら名古屋をとほりながら考へてかえりました。自由展などいそがしいのでせう。出来たら是非君の處女作送つて下さい。

色々うまく行かぬことあつたら知せて下さい。講習をしてみても、エツチングやリトグラフが非常な勢で流行するようになるだらことは想像出来ますが、よい作品(藝術的)なものが出るかどうかはギモンです。

**書簡118 1955年12月31日 年賀葉書、縦書**

**表：名古屋市北区杉村町／三ノ二八／山田光春様／浦和市本太町五ノ四四／瑛九**

新年のおよろこび

申し上げます

今年もよろしく